「同文同種」問題

長谷川鑛平

同文同種もしくは同種同文ということを目にし耳にしたことがあるであろうか。「同文」というのは，『広辞苑』を見ると，「二つ或いにそれ以上の民族または国民が言語として同一種類の文字を使用していること」と解説してあり，「日本と中国との類」とある。「同文同種」となると「文字を同じくし，人種を同じくすること。主に日本と中国についていう」とあって，これは「同種同文」と言っても全く意味内容は変らない。日本人と中国人とがひとしく東洋人で，且つ共に主としてモンゴリア系統の人種に属しているらしく，赤ん坊のお尻にあの青い蒙古母斑が見られるから，同種といってもまず間違いはないようである。そして文字に関しては，わが国が遠い昔からずっと漢字を輸入，借用して国語を書き表わしてきているのだから，漢字に関する限り，一往は中国と同文と言ってこれまた言えないことはない。しかし言語としては，中国語が単音節語で，屈折せず，一定語順に羅列するだけで意味をなすのに対して，日本語は，語尾変化(屈折)もするし，日本語独得の「てにをは」なるものがあって，語順も違っており，言語学的にいって全く別系統の言語である。中国語は，主語＋動詞＋客語と，英語風の語順なのに，日本語は主語＋客語＋動詞と，動詞が最後に来て，全体を締めくくる。しかも，日本語は未だにその出自と系統が突きとめられていない。

今でもわれわれは学校で「漢文」というのを学ばされるので，それに従い倣って，知っている漢字を，英語の語順を参考に書きつらねて見せれば，中国人に対して，たとい話すことはできくても，言おうとするところはほぼ通じるだろうし，相手の方でも，これに答えて文字を書いて見せてくれれば，こちらも何とか或る程度は見当がつくであろう，とよく言われたものである。しかし，これはよほど割引きして受け取らなくてはならないことのようである。私自身，高等学校時代，寄宿寮で満州(今の東北部)からの留学生と同じ部屋で起居を共にし，彼らの日本語が余りにもたどたどしいので，もどかしくなり，英語で言ってみてやはり通じないので，こんどは紙片に漢字を書きつらねて，いわゆる「書話」* をこころみみてたところ，これもやはり一向に通じなかったので，案に相違して驚いた記憶がある。われわれが漢文で習い覚えた漢語は，中国のおそろしく昔の古典――『論語』・『孟子』や『史記』ないし「唐宋八大家文」といったようなものからのもので，その解釈もかなり日本流に押し曲げてこじつけた嫌いがあったようである。私は『論語』のあの舌足らずの，断片のような短い文章が，日本文にすれば数十，数百字の長文に書き表わされ，しかもそれなりに論理も通っているのを不審に思い，専門の人に問うてみたことがある。朱子の『四書集註』の由って来たる所は知らなかったのであるが，素人の私には結局分らずじまいになってしまい，今でもやはり不審に思いつづけている。いずれにせよそういう古典の中国語と現代の中国語とでは，余り変化していない同じ文字を依然用いてはいるけれども，ただそれだけのことで，事実上は長年月にわたる幾変遷を経て，事実上は全く別種の言語になってしまっている由である。

* ちなみに上に「書話」と書いてしまい，「手話」からの連想のせいかとは思うものの，どうも昔，接したような気もするものの，不安なので，手もとの漢和字典をひらいてみたが，やはり見当らなかった。

*

最近，同文同種論の蒸し返されることとなったきっかけは，名古屋地検検事多谷千香子が「朝日新聞」の論壇欄に投書した「日中漢字の共通化を――相互理解深める有用性見直せ」(昭和52年9月3日)であった。その要旨は，

古代から現在にいたるまで，漢字は日中文化交流のかけ橋として大きな貢献をしてきた。両国民の話す言葉は違っていても，同じ漢字を用いて相互理解に役立ってきた。ところが近時，過去において同一だった漢字は，両国が別個独立に単純化し，または創造したために，全く異なったものになりつつある。

これはもったいない話だ。そこで一つの提言——漢字の簡略化が現在やむを得ない方向ならば，せめて同じ方向で簡略化を進めるように，両国代表者からなる共同委員会を作ったらどうか，というのである。これはささいな事柄のようではあるが，長い目でみると，きわめて重要な事柄に属する。

およそ言葉は情報交換の手段である以上，書き言葉であれ，話し言葉であれ，使用する者が多ければ多いほど，この言葉の重要性は増大する。このような観点からも，中国の文字である漢字は，中国の文化を直接，間接に受けた国国には，多少とも共通の文字のはずである。ここで提案者は，指の文化圏，ナイフとフォークの文化圏，ハシの文化圏という，世界の国国を食事のしかたによって3大別する分け方を導入する。ハシの文化圏はほぼ漢字の文化圏と重なり合う。

漢字は日本と中国で，過去において全く同一であった。それが最近，特に19世紀末以来，日本が独自に簡略化して用いるようになった。いわゆる略字である。一方，中国も大革命以来，日本とは別個に漢字の簡略化を始めた。簡略化自体は，進歩化で好ましいことではある。しかし，ここで，かつて同一であった漢字を，日中両国が別個に単純化をこころみて，まるで違った文字にしてしまうことはない。もし簡略字体が同一ならば，依然，それだけ両国文化の交流に役立ち，相互理解の一助ともなるであろうに，もったいない。

ここで日中両国政府は，まず漢字共通化のために共同委員会をつくり，第2段しとて翻訳語の共通化に乗り出したらどうか——と提案者は言うのである。

*

これに対して9月27日，同欄に村田孝四郎（新日本製鉄海外管理課長）の投稿があった。「難問多い日中共通漢字——それよりも中国語を学習しよう」。その要旨は——

日中漢字の共通化についての提案——これはもともと日中同一であった漢字が，それぞれに簡略化が進んだ結果，互いに理解が困難になったので，その共通化を，両国間で話し合って善処してはというので，その趣旨に原則的には同感である。しかし，それには大きな困難が伴うであろうし，また，かりに実現し得たとして，はたしてどれほどの実益があるであろうか，疑問である。

第1，日本側から見て，日中同一字体は，たしかに中国語の間接理解に役立つであろう。何しろ漢文式に読めば，一往はある程度理解できるであろうから。しかし，中国側から見れば，日本語にはカナ文字という全く異質のものがあって，しかもそれが相当重要な位地を占めている。だから，たとい簡略字体を統一してみたところで，カナを学ばない限り，日本語の理解できないことに変りはないであろう。

第2に，中国側の簡略基準の一つに音韻の同一性ということがあるが，これは日本語には，従って日本人にはまるで関りのないことである。ところが中国語としては，とても大切なことなので，ここで簡略化の方向が両者大きく割れてしまう。

第3に，同じ漢字でも，日中で意味が違ってしまっているものがある。字体を統一しても，意味も統一しなければ意味ないわけであるが，意味の統一は今さら不可能なことである。

たとえば，猪は豚の，汽車は自動車の，老百姓は一般大衆の意である。また，中国人には油断の意味が分らないし，日本人には「加油」（頑張る）の意味が理解できない。

第4に，外来語について，日本にはカナという便利な表音文字があるので，これを利用すれば何とか処理できるが，漢字を表音的に使うということはなかなか容易なことではない。固有名詞に至っては，まるでお手上げで，ケネディを肯尼迪，フルシチョフを赫魯曉夫などと，日本人から見たらまさに悪戦苦闘のていたらくである。中国には将来，漢字を廃止してローマ字化しようとする動きがあり，簡体字化はその一過程に過ぎない観がある。つまり日本とは考え方も立場を全く違っているのである。

以上のように見てくると，日中漢字の共通化もさることながら，中国を理解しようというのであれば，むしろ中国語そのものを学習した方が近道である，と投稿者は言うのである。私もそう考える。日本人にとって中国語は，一定段階までの学習なら，英語やフランス語・ドイツ語よりもはるかにやさしい。ロシア語やアラビア語の比ではない。それは文字がほぼ同じで，発音が多少似ているからだけではない。文法がすこぶる簡易だから

である。名詞や形容詞の格変化と複数変化，動詞の人称変化と時制上の変化，文法上の性，冠詞等等，ヨーロッパ語を学ぶ上でわれわれを悩まし，少なからぬ障害となるものが，中国語にはまるでないからである。日中友好ということからは，中国語を学ぶ方がまっとうであり，効果的である，と投稿者は主張しているのである。

*

幕末から明治初期にかけて，新しい西洋文物，学問等がわが国に殺到したとき，その激浪に洗われたわれわれの先輩たちは，苦心さんたんの結果，これら西洋の新概念を，漢字を適宜つらね，組み合わせて熟語をつくることによって，受けとめた。あのとき，日常使いなれていた日本語——やまと言葉で受けとめようとしなかったことは，どうしてだったであろうか。かつてキリシタンが入ってきたとき，主要な信仰用語は，ラテン語をそのまま受け入れた。もっともかなり日本式に訛ってしまったけれども。しかし，それとこれとは別で，彼らは教養人として相当漢字・漢語に慣れ親しんでいたので，漢字2語をつらねて新しく熟語をつくることは，さして困難ではなかったろう。そこで，ついその安易さと便宜に引かされて，新来のヨーロッパ語を，あり合せの熟語や，間に合せの新造熟語で受けとめたのではなかろうか。中国流の漢字1字語ではなかなか落ちつかなかったろうが，2字，もしくは3字，4字とつらねるとそれぞれ意味をもつ漢字と漢字との対立・結合反応の結果，何となく落ちついた。しかし，社会一般への受容は安易には期待できなかったもののようで，老姿心からか，新造の即席熟語に振りがなとして訓読(くんよ)みを添えた場合が少なくなかった。たとえば，たまたま座右にあった明治文化全集『文明開化篇』などに当ってみたところ，

微細(こまか)　衣裳(きるもの)　古風(むかし)　頑固(かたくな)　余残(あまり)——加藤祐一講釈『文明開化』(明治6～7年)

起原(ハジメ・オコリ)　物象(カタチ)　組合(コムペニー)　劇場(シバイ)　貨幣製造局(キンザギンザ)　敝衣(ヤブレキモノ)　顕家豪族(レキレキ)　訛音(ナマリ)　補綴(ツクロイ)　紙幣(キンサツ)——宜信斎蔵板『万国新話』(明治1年)

のようなものが見つかった。貨幣製造局，今の造幣局を，旧幕時代の金座・銀座に引っかけ，紙幣に金札を連想し，組合にコムペニーとあるところなど，なかなか面白い。

これに関連して想起されるのは，あの独得の文語体をもって，爾後の散文に相当の影響を及ぼしたらしい邦訳聖書である。キリスト教の聖書は，当時指導的な内外人数名をもって構成せられた翻訳委員会によって邦訳され，新約聖書は明治13年(1880)，改訳（文語体）明治21年（1888)，旧約聖書は大正6年（1917）に刊行（文語体)，第2次大戦後，日本聖書協会の聖書翻訳委員会によって，改めて口語への改訳が行われて，新約は昭和29年(1954)，旧約は翌30年（1955）に完成，刊行せられた。ちなみに，その後新旧両教徒による共同訳が，固有名の訳語も統一してこの程完成し，売り出されている。ところで，明治・大正期の聖書の文語体訳が，どのようなものであったか，すこぶる興味があるので，さっそくのぞいてみた。文体にまで関説できなくて残念だが，熟語について，一例として，新約聖書（明治21年改訳版）のマタイ伝第5～7章の，あの有名な山上の垂訓のところを見てみたところ，

幸福(さいはひ)　憐憫(あはれみ)　行為(おこなひ)　律法(おきて)　審判(さばき)　施済(ほどこし)　負債(おひめ)
嘗試(こころみ)　面容(おももち)　財宝(たから)　頭髪(かみのけ)　過失(あやまち)

などが目につくが，

燈台(とうだい)　和睦(わぼく)　和解(わかい)　姦淫(かんいん)　色情(しきじやう)　偽善者(ぎぜんしや)　断食(だんじき)　信仰(しんかう)　苦労(くらう)　群集(ぐんじゆう)　権威(けんゐ)

などは妥当な読み方（旧かなづかい）がしてある。（ただ群集がグンジュウとジを濁り，グンシフと旧かなづかいになっていないことが注意された。）

閑話休題。いずれにせよ，かつてラテン語がヨーロッパの知識階級の用語であったように，明初漢字・漢語・漢文がわが国知識人の用語であったので，ヨーロッパの近代文明文化を受容するにあたっても，やはりその慣用用語であった漢語を介しなくては，落ちつけなかったのであろうか。

漢字はもともと孤立語である中国語の用字なので，本来はポツンと1字だけで用をたせるはずのものであった。しかし，日本人としては，その1字だけでは何とも物さびしく，まとまらないので，同系統の，ほぼ同意味の字をもう1字動員して，2字組み合わせた。2字それぞれ意味をもっており，ほぼ同意味，ないし同系統とはいっても，ニュアンスの違いははっきりあるはずで，ちょうど少し方向のずれた2本の平行光線が多少重複交錯し，そのためかえってはっきりそのものが

浮き出して来るように，言い表わそうとするアイディアが，漢字２字の組合せによって，より明確になる，と感ぜられた場合も少なくなかったであろう。もちろん１字でこと足りた場合もあったろう。２字の組み合せだけで足らず，２字＋２字，すなわち４字になる場合もあった。民主主義，財団法人，一夫一婦などのごとく。２字＋１字，もしくは１字＋２字，つまり３字で落ちつく場合もあった。唯物論，唯心論，人生観，世界観，地理学，濃硫酸，稀硝酸などのように。

付記。小学生のとき，「大小の船舶」というのがあって，「大きい船や小さい船」と訳した。ところで試験（私共の小学校では考査といった）に「船舶」が出た。大半の者は「大きい船や小さい船」と答え，私もその一人であったが，一部の者は単に「ふね」と答えた。ところが，担任の先生に代って採点した先生が，前者をよしとし，「ふね」を間違いとした。そこでクラスで，担任の先生も含めて議論が沸騰した。「大小の船舶」なら「大きい船や小さい船」でよいが，大小をはずして「船舶」だけならば，単に「ふね」でよいはずだ，というのであった。そこで，今『角川漢和中辞典』を引いてみると，船，セン，ふね，舶，ハク，おおぶね。船舶，センパク，ふね。舶は大船，とことわってある。ところで当時小学生の私は，単に「ふね」で間に合うところを，なぜ，ことさら「船舶」と言わなければならないか。当時私は舶に「おおぶね」の意のあることは知らなかったが，「船舶」とわざわざ書いてあるからには，やはり，大きい船，小さい船と，さまざまの船を含めての意味があって，しかも，その大小を強調するために「大小の船舶」とことわってあるのだろう，と強く主張した記憶がある。その時の，私のクラスでの結論は，船舶に単に「ふね」で宜しいということにきまった。おさまらない私は採点した先生のところへ出向いて質問したら，その先生はこともなげに「船舶」は「大きい船や小さい船」ですと答てくれた。ちょっと思い出すままに。

*

英語学者の渡部昇一（上智大学教授）は大へん博識で，その著『国語のイデオロギー』（昭和52）によると，中国に北京の文字改革社から出た『現代漢語外来詞研究』という本がある由である。これに，日本がかつて西洋の学問用語を漢字で受けとめて漢字熟語化したのが，逆に中国に輸入されて現に通用しているものの例が集めてある由。たとえば，文学，文明，文化，哲学，科学，経済，政治，社会，宗教，教育，歴史，美術，物理，化学，医学，などはいずれも日本製で，これは魯迅(1881～1936) も認めているそうである。文学はもともと中国にあった。しかし，西洋のリテラチュアに相応するものではなかった。それを日本人がリテラチュアの訳語とした。それが逆輸入されて，結局，文学の字義が入れ替わってしまった。

１語１語話題にすれば，いずれも相当面白いエピソードが見出されるであろう。哲学畑では，フィロソフィアの訳語として西周(にしあまね)(1829～97) が，フィロ＝愛を希で受けとめ，ソフィア＝智を哲，賢……で受けとめ，学で締めくくって「希哲学」「希賢学」を考えた。しかし，どうも語呂がわるい。そこで希を落して哲学，賢学としてみたりした挙句，哲学に落ちついたという話は，もはや伝説化して，誰でも知っていることである。もっとも西周は宋儒の性理の学から，まず性理学を考えたのかも知れない。性学，もしくは理学とも。性といえば今日のわれわれはすぐセックスを考え勝ちであるが，儒学を修めたものには「天ノ命，之ヲ性ト謂イ，性ニ率(シタガ)ウ，之ヲ道ト謂イ，道ヲ修ムル，之ヲ教ト謂ウ」という『中庸』冒頭の章句を思い浮べるはずであって，性とはつまり「生れつき」，ヨーロッパ語の nature, Natur, natura に当る。この「生れつき」は内省的に考えられた。つまり唯心論・観念論の方向に傾き，性学，理学といえば，今日の心理学，あるいは唯心論的哲学，ないし形而上学を意味したであろう。理学も，今日では，理学部，理学博士などから連想されるように，科学→自然科学→理論的自然科学に関連させて受けとられることになり，心理学を連想させることは無理になっている。言葉の運命というものは全く面白いものである。ところで中国では，フィロソフィは智学とされたが，輸入の哲学に負けてしまった由である。

さて，叙上のほか，経験，体験，思想，想像，意味，表情，表記，表象，諷刺，環境，現象，自然，構造，抽象などという，これらなくしては今日，文化諸科学，社会諸科学の成立し得ないような熟語も，軒並み日本製の由である。さらに現在の中国の新聞類にもよく見られる革命，自由，流行，物質，思想，唯物論，唯心論，労働，階級，封建制，政府，現実，主義，世界観，主席，軍国主義，独裁，復員，配給，瓦斯，電力，電報，電信，伝染病，企業，新聞，冷蔵庫，信号，消防，消火栓，周波数，商業，鉄道，登記，投票，特許，

出版，展望，財閥などもみな日本製の由。革命のごときは，易姓革命などと言って，昔から中国にあった言葉であるが，現代的な revolution の意味にしてしまったのは日本人であった。労働に至っては，そもそも，はたらくを「働く」と書くのはいわゆる国字——わがくにで漢字の形をまねて拵え出した文字で，したがって国字には訓はあっても音のないのが普通であるが，働は動にあやかってドウと音読し，「労働」と熟してロウドウと読み，work, labour を意味させた。それが中国にそのまま採り入れられ，ラウトンと発音されているということである。以上のほかにも，まだまだ例はいくらも拾えるとある（12～3頁）。

*

こういう話になると，英語学者の渡部昇一よりも中国人である陳舜臣・陳謙臣兄弟の『日本語と中国語』（ノン・ブック36，昭和47年）——これは小型の通俗読みものではあるが，なかなか示唆ん富んだ好著述であるので，やはりここに言及せざるを得ない。まず目次の一端を紹介すると，

序章・中国語の成り立ち
1章・日本漢字でどこまでわかるか
2章・似て非なる日本語と中国語
3章・日本語より英語に近い中国語

などとあって，その2章では，冒頭に言及した「同文同種」を問題にしている。日本人はこの成語（4字から成る熟語）における「同」を形容詞と受けとって，「同じ文，同じ種」と解するが，中国人にあっては「同」は動詞，それも他動詞であって，「文を同じくさせ，種を同じくさせる」と受けとる。というのは，もともと中国には「同文同規」という成語があった。これはその由来が「文字を同じくさせ，規を同じくさせた」秦の始皇帝の偉大な事蹟にさかのぼる成語である。陳舜臣らの臆測するところによると，往年の日本のいわゆる支那浪人あたりが，同文同規を誤解し，換骨奪胎して「同文同種」という成語をつくったのであろうとある。

そう言えば，当時上海に東亜同文書院という学校があり，多くの日本の青年が出かけて来て中国語を学んだ。その姉妹校が東京にもあって，これも東亜同文書院と称し，中国の日本留学生らがまずここで日本語を勉強し，それぞれ志望の大学へ進んだ。しかし，中国の留学生が日本の殺到したのは明治末期で，大正に入る頃から激減し，東京の東亜同文書院もさびれ始めた。そこで副業に日本人相手の中学校を設立し，目白中学校と称した。私事ながら私はその中学に3，4年と2年間在学した。チンプクアンという安南人，今のベトナム人の先生もいた。ちなみに同中学校は後，中央大学に吸収され，中央大学付属高等学校となって現存している。

さて，秦の始皇帝は，いはゆる戦国の七雄の，秦以外の6国，斉・楚・燕・趙・韓・魏を征服し，中国統一に成功した。当時，その6国には，同じ漢字でありながら，大同小異の，それぞれの文字が用いられていた。それをまず秦の始皇帝は統一した。六国古文の整理統一である。

殷や周は，統一国家といっても，首都中心の，ごく狭い地域の国に過ぎなかったが，秦は36郡といっても現在の18省と大して変らない広大な国家であった。その大地域の政治的統一に成功したのだから，始皇帝が非凡の英雄であったことは言うまでもない。その彼の見た，当時の文字の乱れは目に余るものがあった。中国では，文字は元来，神をまつるときか，神の名において王が政治を行うときに使うものであった。始皇帝は文字のほしいままの使用を押えて，皇帝がもっぱら使用する文字と，彼以外の者の使ってよい文字とを区別し，その書体をも制定した。篆書（テンショ）というのが皇帝専用の書体で，臣下用のは「隷書」であった。篆書（小篆）の特徴は筆画がすべて一様の太さで書かれた，太い細いの変化のない一種の装飾書体であったことであるが，それは一つには筆が今の毛筆とは違って，今洋画に使うようなひら筆であったからである。当時，まだ紙は発明されておらず，木札か竹簡に書くか，石や銅版に刻まれたのであった。（藤枝晃『文字の文化史』昭和46年，50～3頁）

当時，中国は，文字のほか，車の車輪と車輪との幅，いわゆる軌間が一定せず，国の道路は，国国によって多少の違いを見せていた。中国の道路は黄土層のためか，雨が降るとぬかるみ，晴れるとカチカチに乾燥し路面にはっきりとワダチ（轍）が2条，鉄道のレールのように刻まれた。車は従ってこのワダチを辿らなければスムースに進めない。戦時中は，このワダチの違いが侵入軍の戦車に不利であったので，侵入軍の行動をかなりに阻害できるという意味で，国防にも役立った。全国統一を成就した秦には，しかし，これはもはやあらずもがなのことであったのだ。

そこで英邁な始皇帝は，一方，字画を整理，簡素化して篆隷の書体を制定し，他方，車の軌間を一定にした。これがすなわち「同文同軌」で，中国史上，画期的な文化的業績の一つと言われる。

これにならった新成語「同文同種」となると，文字を押しつけ，人種の同一化を強制する，ということになる。まさか結婚政策を強行して，かつてのアレキサンドロス大王のように，また森有礼のように，両国民の通婚を奨励して，中国人をして日本人に同化させようというのではなく，ごく大ざっぱに，また無邪気に，日本人も中国人も，赤ん坊のお尻に青色の母斑の見られる東洋人同士じゃないか，という程度の他愛のない主張であったであろうし，それが中国人に対して親愛の情の表明となるであろうと思ったのであろうが，中国人側としては，とうていそうは受け取られない。太平洋上の小国が，大陸の君子国に文化的・人種的に不遜の強圧的干渉を敢えてこころみようとするものと受け取られて，日中友好どころか，むしろ相当の逆効果を及ぼしかねなかったと陣舜臣らは忠告している。

*

中国では，日本の標準語ないし共通語に当るものを普通語（プートンホア）と言うが，成語，つまり大体4字からなる熟語は，漢和字典で見ると，①二つ以上の語が結びついて一つのまとまった意味を表わす語。熟語。②昔の人が作ったよく使われる語。成句。〔故事成語〕とあって，まさにドイツ語の Sprichwort に当る。陣舜臣らも「通俗化された古典」，「古典のエキス」と言いかえている。大体2字から成る熟語の複合で，2熟語が相寄り相待ってひとつの意味をぴしっと言いあらわしている。そこのところが中国文化を崇拝摂取した日本人にもいたく気に入ったらしく，古来，多くの成語がほとんどそのまま，わが国でも愛用駆使されている。列挙すると

一挙両得　一気呵成　一朝一夕　一瀉千里　七転八倒　大同小異　小心翼翼　天衣無縫　四面楚歌　百発百中　有名無実　自暴自棄　公明正大　四分五裂　一日之長　空前絶後　虎視眈眈　流言蜚語　起死回生　急転直下　博学多才　朝令暮改　単刀直入　新陳代謝　驚天動地　徹頭徹尾　千載一遇　一刻千金　一視同仁　一知半解　自力更生　信賞必罰　千篇一律　孤軍奮闘 ……

余りにも多くあるので驚かされる。しかし，少し違うものもある。日本で「一日千秋」というのを，中国では「一日三秋」という由。中国人は比喩が大げさだと言って，よく「白髪三千丈」が例に引かれるが，三秋を千秋に言い変えたものとすれば，算術的にはまさに333倍にあたる。日中両国で若干の差のあるものを若干挙げれば（日本←中国），

金科玉条←金科玉律，本末顚倒←本末倒置，
日進月歩←日新月異，支離滅裂←支離破砕，
徒手空拳←赤手空拳，快刀乱麻←快刀斬乱麻，
自業自得←自作自受，古今東西←古今中外

古今中外は「教育勅語」に，「之ヲ古今ニ通シテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ」と生かされている。快刀乱麻のごときは，まことに快刀斬乱麻でなくては意味が通じないが，日本人は語呂のよさのためつい斬を置き忘れたのであろうか。ところで成語には，日本では，成語そのままではなしに漢文流に読み下し，その形の方で流布しているものが少なくない。

一敗塗地→一敗地にまみれる。
如魚得水→水を得た魚の如し。
縁木求魚→木によって魚を求める。
勢如破竹→破竹の勢い。
膾炙人口→人口の膾炙（かいしや）する。
帰心似箭→帰心矢のごとし。
良薬苦口→良薬は口ににがし。
百聞不如一見→百聞一見にしかず。
不入虎穴焉不得虎子→虎穴に入らずんば虎子を得ず。
三十六計走為上策→三十六計逃ぐるにしかず。

*

積沙成塔→塵も積れば山となる。
驕兵必敗→おごる平家は久しからず。
対牛談情→馬の耳に念仏。〔馬耳東風〕
飛蛾投火→飛んで火にいる夏の虫。

以上は，『日本語と中国語』に挙げてある中から興味本位に若干を摘記したに過ぎないのであるが，まことに驚くべきものがある。

しかし，考えてみるに，成語はその多くが「通

俗化された古典」,「古典のエキス」であった。ということは，たとい個性ある民族の所産であるにせよ，永年の経験知，生活上の英知，人生哲学であるからには，もはや普遍的水準に達しているものでなければならない。そういう普遍性が中国所産の成語を，そっくりそのまま海を越えた日本の異質の風土に根づかせたのであろう。ことわざ，寸鉄言となると，西欧のものも数限りなく風土化されている。たとえば「鉄は熱いうちに打て」とか,「正直は最善の政策なり」とか，「Boys, be ambitious!」とか，「Out of sight, out of mind」とか，「Well begun is half done」(始め善ければ半ば成就）とか,「Habit is second nature」とか，「Home is best」とか，「Knowledge is power」とか,「Love is blind」とか。「Pity is akin to love」は,『三四郎』の与次郎が「かわいそうとは惚れたてことよ」と名訳している。デカルトの「Cogito, ergo sum」(我考う，故に我あり）や,「Mens sana in corpore sano」(健全な精神は健全な身体に宿る）というようなラテン由来のものも人口に膾炙している。「Philosophy does not bake」(哲学ではめしは食えない）のごときは，アメリカ風のプラグマティズムの哲学を端的に表明したものとして心にくい。金言，ことわざとなると，儒教哲学と並んで日本文化をつちかった仏教教学からのものも，考慮しなければならないが，今は立ち入らない。

*

ところで，いわゆる日中同文の効果の見られる反面，全く食いちがって，不用意に使うととんだ誤解を招くおそれのあるものも少なくない。若干例示すれば，たとえば「経済」は，経世済民という成語より荻生徂徠 (1666～1728) の弟子，太宰春台 (1680～1747)が導き出し，エコノミーを意味させたものと言われるが，中国では，梁啓超 (1873～1929) がエコノミーを「資生」と訳した。我国でも「厚生」と訳した向きもあった。しかし，この場合は経済が逆輸入されて，資生は姿を消した。

Finance の「金融」は金銭の融通に由来したであろうが，中国語では金が融けてなくなる意となる由。

「的」は現代中国語では，所有または所属を表わす。我的鉛筆は私の鉛筆の意。日本では pencil を鉛筆と訳し，これは中国に輸入されたが，pen は日本ではそのままペンで受けとめたが，中国ではこれを鋼筆とした。ところで的をつけて形容詞化した科学的・現実的・主観的などは，そのまま中国へ逆輸入された。大体，主観・客観・悲観・楽観・人生観などと「観」をつけて物の見方を現わすやり方は日本人の創意で，これらも中国に逆輸入されたことは前にも触れた。「界」をつけて文学界・政界・学界などとジャンルを区別し,「式」をつけてやり方や形式・様式をあらわす用法，その他，文学論・社会論・唯物論などにおける「論」，軍事力・機械力・潜在力などにおける「力」，安全率・確率などにおける「率」，といったようなものはいずれも日本の創意で，中国に輸出された。

*

ところで，たとえば「走」は，中国でははしることではなくて歩くことを意味する由。走ることは，跑(パオ)と言う。昔は中国でも走は走(はし)ることであった。後漢の『釈名』に「徐ろに行くを歩といい，疾く行くを趨(しや)といい，疾く趨(おもむ)くを走という」とあって，当時，走ははしるであったことがわかるが，それを日本人が学んで，日本という冷蔵庫にその意味がそのまま冷蔵されているわけである。そのような間に中国では文化事情が一変して死語となってしまったり，まるで意味が変ってしまったりした語も少なくない。走はその一例であるに過ぎない。「言」と「云」はもはや死語で，方言・言論といった熟語がわずかにその跡を止めているだけで，現今では，言う意味には「説」が最も普通で，そのほか「講」,「告訴」も常用されている。告訴となると，日本ではれっきとした裁判用語で，只事ではないが，中国では，ごくくだけた日常の口語的表現の由である。このような例が『中国語と日本語』には数限りなく挙げてある。

*

日本語と中国語とのまるで別個の言語であることは，何よりも端的に，その音韻構造にあらわれている。中国語に四声・平仄のあることは，われわれも漢文を学ばされたときに知った。少年時代，私はおこがましくも漢詩の創作をこころみようとしたことがあるが，平仄がどうしてもわから

なくて，ついに断念した記憶がある。今なお，その詳しい内容には通ぜず，したがって，今，立ち入ることはできないが，そういう日本語の発音・発声に全く異質なものは無視して，われわれの先祖は自分らにもたやすく発音・発声できる音声・音韻で漢語を受け入れた。それが漢語のいわゆる字音である。字音には呉音・漢音・唐(宋)音の3種，さらに慣用音を加えれば，4種ある。中国大陸とは大昔からずっと交渉があったであろうが，6世紀ごろになって，応神天皇のころ，にわかに大陸との文化的接触が密になり，それに伴って優秀な大陸文化と共に文字(漢字)もどっと流れ込んで来た。このころ取り入れられて，わが国風に固まって出来たのが，呉音と呼ばれる字音の層である。当時，中国は南北朝の時代で，文化の中心はむしろ長江下流，古代の呉の国の故地にできた南朝にあった。この呉音が最も古い。ところが後，隋・唐が天下を統一するに至って，こんどは北方の長安が中国文化の中心となる。平安時代，8～9世紀の頃，遣唐使や留学生が赴いたのはこの長安で，これらの人人がそこで習得してもたらしたものの結果が，いわゆる漢音である。時代も違い土地もへだたるので両者の違いはかなり甚だしいものがあった。その結果，わが国では，結局，仏典の読経には呉音が多く用いられ，一方，当時の知識階級の間では漢音が次第に優越し，一般の言語生活では漢呉両音の混用ということになった。

極楽　ゴクラク（呉）—極致　キョクチ（漢）
東京　トウキョウ(呉)—京浜　ケイヒン（漢）
古今　ココン（呉）—今時　キンジ（漢）
関西　カンサイ（呉）—西洋　セイヨウ（漢）

ところが年の経つにつれて，こういう2音混用の中から，呉音でもなければ漢音でもない字音が生まれてきた。一種の雑種現象で，それが慣用音で，たとえば乙の呉音オチと漢音イツとが混雑して現行のオツになったようなものである。

ところで，菅原道真（845～903）の提案に依る遣唐使打切り（894年）以来，長く鎖国状態になったわが国は，室町・鎌倉時代，12～13世紀頃，禅僧によって宋との往来が再開した。（ちなみに鎖国政策は徳川幕府の独占ではなく，平安中期に第1次鎖国時代があったわけである。）当時，北宋は開封に，南宋は江南の杭州に都したが，中国では当時すでに今日の北京語の母体となる標準語が成立しかけていた由。それの日本に流入したのがいわゆる唐宋音で，かなり今日の北京語に近いものである由。和尚オショウ，暖簾ノレン，蒲団フトン，行燈アンドン，看経カンキン，普請フシン などは，この頃の唐宋音の遺産である。

このように過去を振り返ってみたところで，中国語独得のアクセント(四声)は放棄されて，平板でポキポキした日本音になり切っている。この面から考えても，今さら「同文」などと言えた義理はない。歴史的文化的事情から，現行字体にたまたま同形のものもあるが，異形のものも少なくなく，発音はすべてまるで違ってしまっている。

それに，中国語は単音節語で，単語を一定の順序に並べれば，一定の文意を表現できて，日本語の用言の活用にあたるものはない。また単語と単語を橋渡しする助辞もない。単語の並べ方＝語順は，むしろ英語流で，日本語とはまるで違う。両語の差異を知悉し，語順を日本語式に入れかえ，或る字は無視して，活用語尾やテニヲハを補って，中国文を日本語風に読みくだすいわゆる訓読文，つまり「漢文」は，とかく器用だと言われるわれわれの祖先の，まことに興味ある工夫・発明であった。この漢文なるものが「同文」意識を知らず識らずの間につちかったのではあるまいか。しかし同時に，これが半透明の遮蔽幕の役割をして，中国文化のそれ以上の理解を阻止してしまった不利も，否定できない。

*

「朝日新聞」にかつて「中国を知る」という囲み記事が連載されていた。それの92「ことば——マージャン」（昭和52年10月13日）は，叙上と関連してなかなか面白い。

上海で生まれ，新中国でそだった若い女性が，日本に住む母を頼って来日して3年になる。来日前，カタカナとひらがなは覚えたが，漢字は特に勉強しなかった。その彼女が東京の街を歩くと，やたらにスズメの店がある。日本人は焼き鳥を食うとは聞いていたが，なんてスズメが好きなんだろうと思い込んだが，これは実は麻雀の看板を見ての早合点であった。中国語では麻雀はスズメのことで，マージャンなどという遊びは，新中国では禁止されているので，彼女は知らなかった。

日本の歴史を勉強しようと思って『東洋史概説』という本を買った。これは，中国語で日本のことを「東洋」というところからの行き違いであった。〔戦争中，日本人がトンヤンキ（東洋鬼）と言われていたことは，私どもも知っている。〕

ある日，彼女は工場見学に行った。壁に「油断一秒，怪我一生」とあった。これを見て彼女は，日本の労働者の規律のずいぶん高いことに感心した。というのは，これを中国語で読めば，「油が1秒でも切れれば，私を一生責めて下さい」となるからであった。

中国の簡体字と日本の略字とのくい違いには，今，立ち入って論及しないとしても，今日すでに日中の漢字の字体がずいぶん違ってきていることは，前にも触れた。幸いに同じ形がたまたま保持されていても，意味のまるで違う場合も少なくない。このことにも言及した。そこでもし安易に漢字の字体を統一したら，むしろ中国人の誤解を買う機会がかえって増大するのではなかろうか。というのが彼女の懸念であったそうである。

*

もう1編，朝日新聞「論壇」欄への寄稿文に言及したい。実践女子大学（中国哲学）新田大作教授の「漢字の日中共通化は不可能——中途半端な知識は混乱を招く」（52年10月23日）である。

漢字の略字を日中共通のものにして，日中両国間の理解を深め，友好の促進に役立てようというアイディアがある。一見，大へん結構なことのように思われるが，これはやはり不可能なことである，と教授は断言される。私もそう信じる。

第1に，同じく漢字とはいっても，日本語における漢字と，中国語における漢字とは，その働き方にすでに大きな相違が出来てしまっている。そもそも言語の体系からして違うのであるから，したがってこれは当然のことである。

第2に，一般に文字は，その社会に属する人人によって維持されている。親から子へ，子から孫へという継続性も，その重要な一面である。そういう意味では，文字を改革するということは，どうしてもこの継続性をそこなう一面を免れない。その点，好ましくない。

第3に，文字は記録され，蓄積され，伝承されて初めて，その機能を発揮するものである。文字の改革は，この蓄積を中断し，無に帰せしめることがある。昭和21年の当用漢字表公布に始まる一連の，わが国における国語改革の実施は，その趣旨においては諒とすべきものもあるが，前述第2の，言語の継続性をそこなったという点に関しては，計り知れない害を後に残したと言ってよい。われわれはこの過誤を二度とくりかえすべきでない，云云。

*

新田教授は，日中両国の使用する略字・簡体字に関しては，むしろ違っていた方がよいのではないか，と言う。日中両国は同文同種で，過去2千年間，それによって得るところ多かった，とは一般に言われるところではあるが，はたしてそうであったであろうか。実は逆にそうでなかったのではないか。相互理解などあったためしはない，と教授は言い切っておられる。大陸との国交が始まって以来，日本は常に臣下として服従する形で中国に対してきた。中国もそのようなものとして日本を遇してきた。というのが近世までの実状である。文化の面からいっても，大陸文化の滔滔たる一方的流入で，日中文化の交流などとは，とても言えたことではなかった。同じ漢字を用いていながら，こんなことが未だに理解されていないのは情けない。むしろ同じ漢字を用いていたからこそ，このような錯覚が生じているのではなかろうか，と教授はなかなか手厳しい。

日本史のつもりで東洋史の本を買ったのなぞは，まだ罪の軽い方であろうが，もう一つ卑近な例をあげると，中国語で「街」というと大通りのことの由。ところがこれに道がついて「街道」となると，これは大通りに出る道ということになり，また，小さな行政単位の名称ともなって，日本の街道とは全く意味が違ってくる。新田教授はかつて訪中団の一員として上海に行ったとき，中国側の説明員が「街道」を行政単位の名称として使ったのを，日本側は日本式に街道として受けとったため，しばらくは説明全体がとんちんかんになってしまった，というひどい経験をせられた由である。

略字の共通化などに頼っても，得るところは少ない。かえって誤解を招くことになりかねない。中国を理解しようとすれば，やはりまともに中国

語を学習することから始めるのが正道であろう。なまはんかな文字の知識などに頼っては，百害あっても一利もおぼつかないであろう。云云。私もこれにはまことに同感である。

外国語を学ぶことは，中国語にかぎらず，大へんむつかしい。多少の曖昧さ，隔靴掻痒（そうよう）のうらみは，やはり免れない。中国の古典を漢文として訓読したとき，隔靴掻痒的もどかしさと，訓読という手続のために不用意にまぎれ込む日本側の常識とが，奇妙な反応をして，本文の真意を理解したつもりで，実はそれとかなりへだたった，受取る側の文化程度と自尊心に適合するような，独りよがりの誤解像が，そこに出来てしまっていたということが，まま，あったのではなかろうか。私は論語の，あの短い，飛躍の多い文章を，漢文流に伝統的に訓読するたびに，どのようにして，こういう訓読の伝承的様式が生まれてきたのか，不審に堪えない。古典の魅力の一つは，現代人が現代人なりに誤解して，それを身近かのものに感じ取るところにあるのかも知れない。翻訳の魅力も，やはり同じように，当該外国語の genius（精神・神髄）がほんとうはわかりかねるのを，あれこれ苦心して，こじつけた結果に，心の底でどこか共鳴するところがある，という深層心理的事態に，根ざすものがあるのではなかろうか。私は青年時代，岩波文庫が創刊されたとき，その発売第1号であった『万葉集』上を，本文が漢字かな混り文になっていて読めたので，無準備のまま，いきなり読み始め，思いがけず面白いので，短時日の間に読了して，すこぶる大きな感銘を受けた。ところが後になって，土屋文明先生の解説書が手に入ったので読み直し始めたところ，その解説を経て得られるところの理解に，私が前に古典の知識なしで，ぶっつけ読んで得た折角の感得と感銘を，ぶちこわすものの余りにも多いのに驚いた。それを私は逆説的に，古典が魅力をもつのは，ひとつは，現代人の現代人的誤解にあるのではないかと思ったことがあった。その後，素人ながら，ほんのわずかながら古典語が分り始めると，こんどはそれなりにまた『万葉集』が面白く読めるようになった。どうも或る限度までしかわからないその不可知の部分を，こちら側の私的理解と主観的情感で埋めて行くところに，その人なりの独得の面白さと魅力のあることは，どうも事実のようである。夜目，遠見，傘の内，余りはっきりしないでおぼめいた曖昧さの残るところが，何事についても，魅力の一部であるのかも知れない。

〔昭和53年10月13日稿〕